

# ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

先日、令和2年版の厚生労働白書が発表されました。この白書の中に、「人口1000人で見ると日本」と、「日本の一日」という頁があり、医療関連についても興味深いデータがいくつかあったのでご紹介しましょう。日本の人口を1000人とした時、「日常生活の悩み・ストレスを感じている」人は47・9人(12歳以上)。「健康状態がよくない・あまりよくないと感じている」人は、12・6人(6歳以上)。現実には、1日で2371人が出生し、3784人が死んでいます。内、がんが死ぬ人は1031人。心疾患で死ぬ人は569人。老衰で死ぬ人は

## 女優 竹内結子



他人事と思えない自死

# 「ご家族は自らを責めないで」

334人。事故で死ぬ人は108人。そして自殺で亡くなる人は、55人。

この狭い日本で今日も、50人以上の人が自ら命を絶っている——それが日本の現実です。だから、「自死」とはありふれた日常なのですと言いたいわけではありません。50人のその向こうに、悲しみにくれるご家族や

友達がそれぞれ何十人、何百人と毎日生まれ続けていることを、忘れてほしくないのです。

9月27日に40歳で亡くなられた女優の竹内結子さんの死をこの連載に書くことを躊躇していました。人気者の自死の報道は影響が大きすぎるからです。あれから1カ月経った今、僕は医師としてではなく、親を自死で亡くした、この国にたくさんいる子供のひとりとして、少しお話しさせてください。

僕が高校生のとき、父は首を吊って自死しました。珍しく、「一緒に京都に行こう」と言われていくつか寺社を巡った後、

四条河原町駅で「先に帰れ」と言われました。僕は仕方なく帰宅しましたが、父は帰ってこない。警察から電話があったのはその数日後でした。遺体安置所で焼き場に運ばれる直前の父と対面。途方に暮れる母と弟を長男の僕が支えねばならないと、歯を食いしばって大人になった気がします。

人生を狂わせた父を恨み、なぜ止められなかったのかと自分を責め、自暴自棄になった青春時代。でも、もしも父が自死しなければ、僕は医者にならなかったでしょう。死んだ父の年を越えた頃からようやく冷静に父を悼むことができました。

だから、竹内さんのご家族を他人事とは思えません。どうか、自分を責めないでと伝えたいです。どんなにそばにいても、愛していても、相手の心のすべてを理解することなど人間には不可能です。そして自死は、恥ずべきことではありません。故人の記憶を封印せず、美しい思い出を言葉にし続けること。それが何よりの供養であり、家族の回復の道のりだと思います。